

福井の幕末明治 歴史秘話

<第32号>

平成29年11月22日発行

命がけで天然痘に立ち向かった幕末医師 笠原白翁

幕末期、福井藩で起こった近代医学の芽生え、種痘（天然痘の予防接種）の普及。今回は、この普及に尽力した医師、笠原白翁（はくおう）を取り上げます。

笠原白翁は、文化6（1809）年、町医者の子として足羽郡深見村（現在の福井市）で生まれました。28歳の時、加賀の大武了玄（おおたけりょうげん）と出会い西洋医学の素晴らしさを知り、32歳の時に蘭方医の第一人者であった日野鼎哉（ていさい）のもとで学びました。



笠原白翁肖像

弘化2（1845）年、30万人（当時の人口の1%）もの死者を出していた伝染病、天然痘について、牛痘種法という予防法があることを知ります。翌年、白翁は、痘苗（ワクチン）を輸入しようと藩主・松平春嶽に請願書を提出。請願書には、“飢饉、戦争、疫病は国家の三大厄難。その中でも、疫病は最も人命を奪い、国力を弱める”とし、国家の視点に立ち、その必要性を論じました。白翁は、経費をすべて自分で負担するとまで記載し、その熱意を表します。しかし、請願書は役人の手元に留められ、春嶽の手元に届きませんでした。一介の町医者が藩主に対し、請願書を出すなど異例中の異例と考えられたのでしょうか。

嘉永元（1848）年、白翁は2回目の請願書を提出。付属書類を充実し、痘苗の採取法まで具体的に説明を尽くしました。請願書は春嶽の手元に到達し、事業の有益性が認められます。その背後には、侍医で白翁の同志の半井仲庵（なかいちゅうあん）の働きかけがあったとも言われています。また、春嶽の先見性がなければ認められなかった案件でした。春嶽は過去に全治1年以上となる疱瘡にかかったことがあり、病の恐ろしさを知っていたこともあるでしょうが、白翁の熱意が遂に幕府を動かしたのです。春嶽は、幕府に働きかけ、老中筆頭の阿部正弘にも話をし、痘苗の輸入が認められました。

嘉永2（1849）年には、長崎に痘苗が到着。白翁は、同年9月30日、受け取りのため長崎に出発します。白翁は、途中京都で、すでに痘苗が京都に到着していることを知ります。そして、京都、大坂の除痘館開設に尽力した後、福井へ旅立ちました。痘苗は成分を維持し続けるためには人の体内に接種（種痘）し、人から人へ植え継いでいく必要がありました。白翁は痘苗を福井に持ち帰るため、種痘をした子供たちを連れ京都を出ます。道中の栃ノ木峠には2メートル近く雪が降り積もり、何度も遭難の危機に遭いながら、まさに命がけで痘苗を福井に届けたのです。

嘉永2（1849）年12月、仮除痘所を福井に開設。その2年後、公立の種痘所が、開設され、急速に種痘が普及していきました。福井藩の種痘所は他諸藩よりかなり早く、これは医学における先進性を物語っています。種痘を公営事業とすることに尽力した白翁の熱意と、それを理解・許容した春嶽の二人が成し遂げた偉業だったのです。

白翁の「白」はオランダ語のワクチン（ワクチン）の「ハク」だと言われています。種痘の普及に命をかけた男に相応しい名前と言えるのではないのでしょうか。

<参考資料>松平春嶽のすべて（新人物往來社）、若越山脈（青少年育成福井県民会議）

～幕末ふくい歴史紀行～ [種痘所「除痘館」跡地(福井市春山)]

福井に痘苗を持ち帰った白翁は苗を断絶させないために、隣家に除痘館を設け種痘を開始しました。白翁の藩への働きかけもあり嘉永4年に公営の除痘館が開設されました。



★幕末明治福井150年シンポジウム開催！

日時：平成29年11月26日（日） 13:00～16:00 会場：福井県立歴史博物館（福井市大宮2-19-5）

第1部 基調講演会「ニッポンの夜明けは福井から～幕末の名君・松平春嶽～」 講師：加来耕三

第2部 シンポジウム「史源を魅せる、活かす！～歴史を活かした人づくり、まちづくり～」

※入場無料・要事前申込